

『きけわだつみのこえ』を解釈する

中尾訓生

一、「解釈」ということについて

解釈は解釈者が意識的、無意識的に抱いている価値観そして意識的、無意識的な日常生活実践と不可分離である。特に解釈対象が大多数の人々に重大な影響を及ぼす出来事であるとき、この不可分離は明らかである。解釈が言語を通じてなされるとき、実践が解釈に必要な単語を彼にとって所与である単語のプールから、無意識的に選び取っているのである。これら諸単語の組み合わせが解釈である。解釈はいうまでもなく、意識的行為である。状況の変化は解釈者に新たな用語を創出させることにもなる。旧来からの用語の体系では変化した状況を解釈できないからである。用語の創出は解釈者の実践の質、ライフスタイルに、つまり保守的であるか、革新的であるかに規定されてもいる。正当化解釈と実践とが不可分離であることの帰結である。

無意識的に選び取るとは、その実践によって規制された単語のグループからのみ選び取っているということである。つまり諸単語は実践によって色付けされているということである。逆に言うと色付けされたグループの中から単語は選び出されている。解釈は選び取った単語を体系的に配列することである。つまり体系化することである。色付けの異なったグループからの単語の混合はそれらの体系化を困難にする。論述の不整合をもたらすであろう。これが解釈と実践は不可分離という意味である。体系化は実践と価値観によって規定されている。実践を正当化する解釈と実践は不可分離であるので、解釈するということは間接的に解釈者自身が解釈されているということになるのである。

『きけわだつみのこえ』(以下『わだつみ』)の解釈にあたって重要なことはどんな単語を使用しているかではなく、それらがどのように体系化されているかなのである。なぜなら学徒兵の実践は戦いの場における実践であって同質的であるから。したがって選択された諸単語は彼らには共通している。

『わだつみ一集』の編集者・中村克郎はこのことを全く理解していない。この点については後述(『わだつみ』の編集方針について)する。

人は何故解釈するのか。

解釈は暗闇の中で灯りを求めるように人間の本源的欲求である。解釈は自己省察である。‘人間は、自分は何者であるのか’という問いを自己の置かれた状況が厳しければ厳しいほど必ず発する。そして過去、現在、将来の中で自己を位置づける。

彼らは最終的に依拠するところのものを探求する。依拠するところのものによって、彼らは実践を根拠づける。実践を根拠づけるのは自己が何者であるのかを確定するためである。したがって、彼らは自己を、自己自身の置かれている状況を明確にせざるを得ない。つまり解釈せざるを得ない。

学徒兵の置かれた状況、彼らの経験した社会的出来事はこの本源的欲求を痛切に喚起する。彼らは文字に対する切ないほどの飢え(読むこと、書くこと)を訴えている。「メンソレータムの効能書を裏表丁寧に読み返した時などは、文字に飢えるとは、これほどまでに切実なことかとしみじみ感じた」と。しかし軍隊生活は彼の精神を萎えさせる。「一時猛烈であった書物への飢えも近頃は、全然鈍くなってきた。・・・文化的書籍にたいする生理的欲求などは早くなくなってくれたほうが、気持ちも楽になってよい」と記すようになる。軍隊生活が彼らの人格をいかにスポイルしていったか、その雰囲気を知覚しておくことは『わだつみ』を解釈する上で重要である。しかし彼らのある部分は要領よく、軍隊生活に溶け込んでいる。あ

1) 竹田喜義：18年12月入営、20年4月戦死。22歳『わだつみ一集』

るいは溶け込もうと努力している。ある学徒兵はこれを偽装の生活と呼んでいる。彼は偽装であることを自覚している。偽装の生活，すなわち実践と正当化解釈との乖離の拡大である。拡大していく乖離を解釈の変更によって縮小しようと彼はもがく，結果として更なる偽装の生活の継続である。偽装の生活によって彼は状況の中に一時的に溶け込むことができる。彼は一時的に精神の安定を得る。「僕は機械のように与えられたことだけをなし，必要となれば必要の程度だけ感激を装った。教育者の与える感激の場面に，僕はその裏面の卑劣な計画のみを見た。偽りの涙が将校の情誼を育て，嘘の感激が，いたずらの悲憤慷慨が生徒の憂国の丹心であるのを見た。」²⁾しかし偽装の生活はやはり彼に精神の安定をもたらすことはなかった。卑劣と自己嫌悪を感じた。彼はそれが偽装であることを自覚しているが故に。

解釈が他者に受容されたとき，その欲求充足を彼らは感得するのである。他者とは彼らが最も信頼している人，愛している人，つまり彼らがアイデンティティを感得し得る人々である。ここでは彼らは正直であって偽装の体裁をとったりはしない。他者は抽象的ではなく，具体的存在である。

本稿は、『はるかなる山河に』『きけわだつみのこえ』（一集，二集）を解釈しようというのである。私の解釈枠組では，彼らの遺した文章の背景となっている価値観，彼らの実践をも読み取らなければならないことになるのであるが，これは困難である。「これらの本に収録されている遺稿はその学生の遺したものの中のほんの一部にすぎない」のであって編集者の価値観は読みとれても当の学徒兵の日常実践，価値観を読むことは難しい。

しかし彼らの苦悩の由って来るところ，苦悩に如何に彼らは向き合い，処したかは読むことはできるであろう。そのために前述しているように，彼らがぎりぎりの状況で依拠したところのものを摘出することが求められ

2) 松永竜樹：昭和17年2月応召入隊，19年5月28日戦死，27歳。戦死時の階級は陸軍中尉『わだつみ二集』

るのである。

彼らにとっての実践は「書く」ということでもあった。書かれた内容のいかんにかかわらず、「書く」ことは彼らにとって、本源的欲求の発露であった。ペンを置き、銃を手にせざるを得なかった彼らにとって「書く」ことが、戦場における自己の存在を確保することであった。少なくとも『わだつみ』に登場する学徒兵の大半は軍部、政府の大東亜戦争の宣伝には嫌悪感を示している。つまり戦争それ自体に意義を認めているものは殆どいない。「書くことの本質が奈辺に在るか／私自身よく考えてみると何ゆえに書き始めたかという疑問に逢着せざるを得ない。／私は時々、書きたい非常な欲求に駆られることがある。ただ書き記したいのだ。……書きたい欲求が喪われたならば、私にとって、もはや私の生活は意義を失うものとおもっている。」³⁾このことは『わだつみ』全編に満ちている。「書く」ことで彼らは、強制された状況、不合理な状況をなんとか受け入れようとしたのであろう、納得しようとしたのであろう。帝国を信じて「勝利」にアイデンティティを求めた学生も存在していたであろう。しかし私は彼らもまた深い苦悩を内に秘めていたと推察する。残念ながら『わだつみ』にはかかる遺稿は採録されていないが。

学徒兵は解釈を他者に提示しても他者とのやりとりは難しかった。しかも解釈は厳しい検閲下でなされたものである。解釈は相互にやりとりをして受容されるか否かということになるのであるが、しかし学徒兵にはこのような時間も与えられていない。だから学徒兵の切なる願いは自分自身の存在を記憶にとどめておいて欲しいということであった。俺という人間がこの世に存在していたことを忘れないでいて欲しいということであつたろう。

戦いの場で彼を支えたものはたった一人の人への思いである。

3) 中村徳郎：昭和17年10月入営，19年6月7日比島方面で行方不明．，25歳『わだつみ，一集』

俺の言葉に泣いた奴が一人
 俺を恨んでいる奴が一人
 それでも本当に俺を忘れないでいてくれる奴が一人
 俺が死んだらくちなしの花を飾ってくれる奴が一人
 みんな併せてたった一人⁴⁾

二、学徒兵の苦悩

学徒兵の苦痛、苦悩とは肉体的のみならず、精神的なものである。「軍隊生活において私が苦痛としましたことの中で、私の感情——繊細な鋭敏な——が段々とすりへらされて、何物も恐れなかわりに何物にも反応しないような状態に墜ちてゆくのではないかという疑念ほど、私を憂鬱にしたものはありません。私はそうやって段々動物になり下がってしまうよりは、いつまでも鋭敏な感情に生きつつ、しかも果敢な戦闘を遂行したい衝動にかられています」⁵⁾と。学徒兵の意気地として最後の最後まで意識的でありたいと願う⁶⁾。このことは軍隊にあっては殆ど不可能であっただろう。日本軍隊は動物を飼育するところであって感情をもった人間は生活できない。ある学徒兵は次のように記している。「内務とは無理と不合理の権化。軍紀とは欺瞞と要領の成果。初年兵には人間の生活はない。」⁷⁾

また別の学徒兵は次のようにも言っている。「軍隊は馬鹿になって過ごさねばいたたまれないところだと信ずるようになった。理屈もなし道理もない。二言目には鉄拳に物を言わせる野蛮的な者が多い。軍隊は教育場にあらず監獄なり。意志弱き賢人を気違いならしめ常人をして理想を失わしめ、

4) 宅嶋 徳光，昭和18年入隊，昭和20年殉職，24歳『わだつみ二集』

5) 大井栄光：昭和13年9月1日入営，16年6月14日戦死，26歳『わだつみ一集』

6) 「もし私が「死んだ」というしらせがあったなら，自分の意志に反して敵弾に倒れたのではないと信じて下さい。戦闘惨烈を極めいよいよというときは自分自ら命を絶つことを肯定して自らの手で果たすつもりでいます。」前掲，中村徳郎

7) 前掲，松永竜樹

世をなげかしめる気違い病院なりと思う。」⁸⁾軍隊教育の主眼は軍紀の維持であるが、その内容は日常的暴力であった。

非人間的軍隊生活(腕力と形式、要領の支配)のあれこれについては『わだつみ』学徒兵がひとしく記しているところである⁹⁾。かかる軍隊生活の中にあっても彼らは書くことをやめなかった。それが人間の証であるかのよう

ある学徒兵は『ドイツ戦没学生の手紙』に感銘したと記している。彼はドイツ戦没学生がどのように苦悩に処したかを自分の体験に照らして整理している。

「彼ら(ドイツ戦没学生)の精神に平衡と調和とを求めさせないではないほどの驚駭と矛盾とは何であろうか。おそらく第一には、感覚的な戦友の死や、その悲惨な死にざま、深くえぐられた墓などの光景であろう。しかし、そういうおそれはたいてい一時的である」と記して彼らの「本源的な嘆きの声」を次のように記している¹⁰⁾。「お前はまだ若い命をひかえてい

8) 長尾 弘：昭和20年6月入隊，20年10月10日殉職，19歳『わだつみ一集』

9) 松永竜樹は云う。「作戦要務令と歩兵操典は完璧である。軍人勅諭と戦陣訓はあますところがない。しかもそれらの講義には何の方針もなく何の効果もない。小学校の修身とどれだけの開きがあるのか。／日本陸軍に教育なるものなかりせば……おそらく日本の陸軍は世界に一流の軍隊でありうるだろう」と。福中五郎は暴力の支配する軍隊生活を「いいと思っていた戦友も、いよいよ本性を現してきました。一日に二回ぐらいの割合でなぐられています。兵営内には一人として人間らしいものはいません」と記す。軍隊内では暴力が常態であることはすべての学徒兵は実感していたであろう。内での暴力は当然のことながら中国人にもその他のアジア人にも向けられている。川島 正は兵士の中国人に対する暴力を記している。長谷川 信は教育について「幹候，その他の試験，実に馬鹿馬鹿しい。近代文化の精を極めてこれからの戦争に処する我が国の軍隊に文字を一字一句違えたらいかん……の原始的な非能率な国民学校流のものが存在するとは」と記す。素養試験，幹候試験は思考を停止させるものであり，軍隊秩序の強化には貢献するであろうが，実際の戦いには役に立たないものである。住吉胡之吉も軍隊教育について述べている。「見習い士官が兵を教育しているのを見る。高声をはり上げる。全くただ時を費やすべく費やす空虚な時の浪費。勅諭暗唱の強要。愚だ」と。これらは『わだつみ二集』からの引用である。

る、お前は始めようとしたばかりだ。それだのにもう止めなければならぬのか“大いなる人生を無造作に放棄してしまうのには、自分はまだ人生を知らなさすぎる”というドイツ戦没学生の嘆きはこの学徒兵をはじめとして多くの学徒兵に共通しているところである。「生きて帰る、俺にはまだまだ山ほど人生がある。いや俺ばかりではない。生きとし、生けるものすべてだ。それがみんな死の中で育ち、ほんものの死へ入っていかなくてはならぬとは」と記している¹¹⁾。彼らは与えられた状況に納得できないのである。与えられた状況とは具体的実践（軍隊生活）と社会の体勢的観念体系とから成っている。観念体系とは国体思想であり、東亜共同体の理念である。観念体系と個々の具体的実践との乖離を認識すればするほど彼らの苦悩は深まってゆく。ある学徒兵はこの事を次のように記している。「言説と標語の掲示にのみ急にして而も何とそれが美辞麗句に富んでいることか。実践と実現とに隔たる事遠い現状は洵に憎むべきである。その意味において私は文字を畏れる。用ふべき文字を。」¹²⁾ 彼は言葉の欺瞞性にあきあきしている。腹立たしさを覚えている。もはや言葉によっては実践をカバーすることができないことを自覚していく。しかしながら言葉を捨てることはできない。

実践と言説の乖離がはなはだしければ、精神の平衡を乱す。しかし実践と自己正当化の言説は本来乖離するものである。問題は乖離の程度なのである。軍国主義社会は乖離を拡大させることでその存立を確保している。社会はその存立の危機に直面するとき、所与の観念体系の強化をはかる。一層の乖離の拡大となっている。そこで精神の平衡を如何にして保つかが彼らの命を籠めた課題となっていくのである。ペンの代わりに銃を持たさ

10) 池田浩平：高知高等学校文科，昭和18年12月入隊，19年9月戦病死，21歳『わだつみ二集』

11) 上村元太：18年1月10日入営，20年4月戦死，24歳『わだつみ一集』

12) この引用文は『わだつみ一集』では除かれている。『はるかなる山河に』149頁，中村徳郎。

れた学徒兵故の悲しみである。「一体私は陛下のために銃をとるのであるのか、或は祖国のために（観念上の）又或は私にとって疑いきれぬ肉親の愛のために、更に常に私の故郷であった日本の自然のために、或はこれら全部又は一部のためにであろうか」¹³⁾と自問するが、心に決着をつけることはできない。

「自分は戦時よりも平時に祖国と国民のためにより多く役立ちうると確信」しているのに生を終えなければならぬと嘆いている。彼は「アジアの解放」「東亜共同体の建設」の為というこの戦争の意義がまやかしであると軍隊生活の中から実感していつている。したがって戦争に自己を帰一させて苦悩を解消させるということはできないのである。

戦没学生はどのように苦悩に対処しているのだろうか。「ドイツ戦没学生がこの苦痛よりのがれ出で救われんとしての所作はそうとう人によって異なっており、その態度は私にとってことのほか興味深いので、今それをあげてみたい。もちろん、人間なるゆえ、ここに分類するような一部分のみでそれを行おうとするのではないが、ここにはかなり濃厚に現れたものを採ったまでである」¹⁴⁾と述べている。私も『わだつみ』をこの学徒兵（池田浩平）の読み方を参考にして読むことにする。苦悩への対処とは、結局与えられた状況の受け入れであるが、受け入れの根拠は人によって様々である。

この学徒兵は『ドイツ戦没学生の手紙』から以下のように12項目を挙げている。

第一に、諦観する者。

第二に、自制する者。

第三に、自然に慰められるもの。ゲーテの詩がよく結びつけられている。もっとも多く現れるのは星空である。

13) 菊山裕生：昭和18年12月入隊，20年4月29日戦死，23歳『わだつみ一集』

14) 前掲，池田浩平

第四に、次代に文化建設を思う者。

第五に、戦争の意義を自覚する者。

第六に、ひたすら沈黙せんとする者。

第七に、文学に心を寄せる者。

第八に、故郷に思いを馳せ、母とはるかに心深くまじわる者。

第九に、先にあげた平衡・調和を得んとして努力する者。

第十に、愛に生きようとする者。

第十一に、死をまっこうより肯定する者。

第十二に、運命観とともにある者。

彼によると「ドイツ戦没学生」はこれらのどれかに依拠して何とか精神的安定を得ようとしているのである¹⁵⁾。(一)から(十二)までに分類されたもので重なっているものが、いくつかある。

彼は(一)から(十二)の各項目はつまるところ「自己は何であるか」という問いにまで深められなければならないと言う。精神的苦悩の由って来るところ、精神的苦悩への対処は「何をなすべきか」でなく「自己は何であるか」を追求することによって果たされると言うのである。彼は人間について深い洞察を行っている。「私はいったい、何であるのか、また何であればよいのか。答えはキリスト者であり、同時に日本人であるという一事を措いてほかにない」と。これ以上は記していない、指摘するに留まっているだけである。

彼は自己の依拠する所を述べている。「戦争の破壊面だけを見ることはできない。その建設の日の悩みを常に思うているのである。これが、日本人として、学徒として、私がありうるもっとも素直なあり方なのではないだろうか。」「私はいつまでもこの美しい祖国とともにあるであろう。」美しい祖国を安寧させるためのやむを得ざる戦争ということであろうか¹⁶⁾。

15) 前掲、池田浩平

三、『わだつみ』の中で学徒兵が依拠したところ

彼らの依拠したところを一応整理すると以下のごとくであろうが、これらの項目は相互に関連している。したがってどれか一つに依拠していたというわけではないであろう。しかし彼らの内に貫徹しているものは厳しい状況下で誰もが書連ねていることである。書くという欲求を支えているものは‘自分は確かに存在していた’ということを訴えることである。

- 一、諦観。
- 二、美しき祖国、日本の自然。
- 三、次代の文化建設、後に続く者あるを信じて。
- 四、祖国に思いを託して。
- 五、ひたすら沈黙。
- 六、文学、学問。
- 七、故郷に思いを馳せ、両親、兄弟、姉妹と心深くまじわる。
- 八、愛に生きる。
- 九、死を従容として受け入れる。

16) 『わだつみ』には彼と同様な人間洞察をしている文章が数々存在しているのであるが、彼が唾棄すべきとしたような手記は残念ながら収録されていない。『『ドイツ戦没学生の手紙』に感銘の深かったあまり、日本の学徒がいかに戦っているかをぜひとも知ろうと思い、河野通次の『学生兵の手記』を買って読もうとしたが、二、三十ページ読むと、もはや耐えられなかった。虚飾と傲慢が、ひどい悪臭を放っており、戦場において当然打ちくだかれてくるべきものを、かえって歪曲したまま昂じさせて、しかも、得々としてこれを発表する厚顔、彼が無意識裡に誇っているインテリ兵とはいったい何だ。」確かにこの手記は彼が言うように傲慢さに溢れている。東大法科に在籍しているということが、河野通次の拠り所である。河野が戦友について語る時、まず学歴からである。しかし銃にアイデンティティを求めた河野といえども、軍隊生活は苦痛であったろう。ただ『わだつみ』の学徒兵のほとんどは精神的苦痛を訴えているのであるが、この書物においては河野の精神的苦悩というものを読み取ることはできない。彼は東亜の理念を熱もつ語りながら、民族差別意識を捨てることはない。おそらく東大のインテリ兵ということと民族差別意識が彼を支えているのであろう。河野のような学徒兵が体勢的なのであろうか、それとも『わだつみ』に採録されている学生が体勢的なのであろうか。河野通次『学生兵の手記』三省堂。

十、人間として。

池田の分類したドイツ戦没学生に倣うと私は『わだつみ』で10項目を挙げることができる。ただし(一)から(十)のどれかに依拠して彼らの苦悩が処理されていると言うのではない。三井が述べているように『わだつみ』の中に脈々として動いているものは、「簡単に割り切れる論理、つまり死の論理ではなくして、割り切れない論理、迷いの論理、物の実体を見極めようとする努力の論理、即ち生の論理である。」¹⁷⁾

彼らは死に対する心の決着をつけたと記しているのであるが、すぐさま迷いを訴える。

これは至極当然なことである。まさに彼らは生きているのである。彼らは生きているからこそ死の瞬間まで自己のアイデンティティを求めてやまないのである¹⁸⁾。

* 諦観：死刑を宣告された木村は部下に責任を押しつける上官の態度に悲憤慷慨していたのであるが、執行の日が近づくにつれて普段なら見逃し

17) 三井為友『『戦没学生の手記』に寄せて』所収『はるかなる山河に』

18) 松永竜樹：昭和17年2月応召入隊，昭和19年5月28日，中支河南省魯山付近にて戦死，27歳，戦死時の階級は陸軍中尉，入隊してから2年3ヶ月の命であった。この間，彼の覚悟は揺れに揺れている。「兵と将校との間には強制と志願との越えられない絶対の線がある。・・・(将校である僕は)軍隊社会の中に僕の個人としての位置を宣明し積極的にこの社会のために動かなければならない。今まではできるだけ殺すまいとして生きた。これからは殺そうと意志するのだ。自分個人のことをいえばどうにでもして生きて帰りたいと思い，在隊中の時は数えまいとした。今は死のうとしてすべての時を数えるのだ。兵隊を殺して将校が生きていることは絶対に許されない。この日僕は生還を期さない。もちろん出征の日に覚悟はした。しかしそれはあくまで受動的であった。今や僕は死を求める」と覚悟のほどを記しているが，この覚悟は次のように変化している。「文化・文学・新古今の仕事に完全にあきらめることはもう僕には不可能だ。・・・顧みればこの一年半は高熱に侵された悪夢のようだった。僕の一生の暗黒時代だ。・・・簡単に死ぬことは人にほめられるだけ実は卑怯なのだ。できるだけ生に執着し生きて帰らなければいけない。」「済南に来てから死への新たな覚悟と宣言と，そして努力と煩悶と，一月，今や静かに自分にもどった心だ。あともどりかもしれない。そうだ卑怯だ」と心の内を記している。私はこのような迷いに共感を覚える。

てしまう日常のありふれた行為、出来事に生を実感する。自然の営みの内に生を認識する。「生の実感」、あるいは「生の認識」は死に直面しているが故に達するのである。諦観によって得た心の余裕であろう。「口に含んだ一匙の飯が何ともいい得ない刺激を舌に与え、溶けるがごとく喉から胃へと降りて行く触感を、目を閉じてジット味わう時、この現世の千万無量を複雑なる内容が、凡てこの一つの感覚の中に込められているように感ぜられる。泣きたくなることがある。しかし、涙さえ今の私には出る余裕はない。極限まで押し詰められて人間には何の立腹も悲観も涙もない。ただ与えられた瞬間瞬間を有難く、それをあるがままに享受してゆくのである」と記している。木村は処刑前夜に「おののきも悲しみもなし絞首台母の笑顔をいただきてゆかん」と詠む¹⁹⁾。

* 三崎邦之助は自然の生命力、再生に自己を託す。「木という程のものも見えませんが、兎に角木らしいものは全て葉を落としつくして味気なく立っています。／一切の青いものが姿を消している中で殊に憐れに、細い茎からは僅かに二三本宛の枝が出ているのみです。しかしこんなのがよく来るべき春には又芽を出すものだと思って、近寄ってみるとちゃんと蕾がついていて、而も蕾のついている枝に限ってよくしなった釣竿の様にぴんと弾力をもって空の方へ必ず弧を画いています。矢張りどんなに少しでも太陽の光に近づこうという無言の欲求を示しているのかも知れません。」²⁰⁾

19) 木村久夫：昭和17年10月入営，21年5月23日。戦犯刑死。28歳『わだつみ一集』

20) 三崎邦之助：昭和19年7月応召，敗戦後シベリアにて戦病死，24歳『わだつみ一集』
御厨 卓爾：昭和18年12月入団，20年6月南九州沖にて戦死。22歳。彼も自然に自己を託して死を了解せんとする。「もさもさとうずくまったこの足もとの枯芝に、また一塊の黒土にそしてこれらのものの、拡がりの中に、大地の暖かみ自然の柔らかい匂いがしみじみと漂っている。これは故郷の土の匂いでもある。また総てのものの生活の姿ではなからうか。この名もなき芝は、この大地から生まれ、そして今その生を終えんとしている。暖かき大地の母愛に抱かれて、その『時』を待っている。／満ち足りた心で母なる大地の暖かき愛のもとに帰入する。そして静かに永遠の生命の発展を祈っているのである。私はこの小さな一本の枯芝に、日本人としての人間の生きる姿を見出したように思った。」

*愛する人のために、愛する人が住む祖国のために死することはできる。大日本帝国のためではない。殆どの学徒兵は母について語っている。そして母がいつまでも丈夫であって欲しいと願う。

「家の健全は母上が丈夫であることだと思いました。泣きっぽい母上ですからちょっと心配ですが泣かないで下さい。私は笑って死にますよ。」²¹⁾

「君のことを忘れなくても職務は充分遂行できると確信している。」²²⁾

「生命への自信をもって南へ征くつもりだ。どうか現在のきみのままで良い。そのままの精神と健康がほしい。静かな中に情熱に生き、情熱の中に静かな性質の持主であってほしい。きみの顔が浮かぶ。情熱的な黒目がちの目、きりっとした中にも愛くるしいまでに引きしまった口、ふくよかな胸のあたり、君のまぼろしが浮かんで消えない。」²³⁾

「自分は従容として死に就くことは出来るつもりなり。しかし国家への疑惑あるを否定し得ない。／日本は好きだ、愛する。／美しくも清き富士、郷土愛、民族愛が祖国愛たることならば、人後に落ちない。だがただ過去の歴史、国体のために戦うのはどうしても割り切れぬ。」²⁴⁾

21) 大塚 晟夫：4月28日、沖縄沖で戦死、23歳『わだつみ一集』

「お母さんが楽しまれることは私が楽しむことです。お母さんが悲しまれると私も悲しくなります。／私は母ちゃんに祈って突っ込みます。」林 市造：沖縄にて戦死、23歳。『わだつみ一集』「親孝行を、文字通りの親孝行をして、旅行をして、静かにこの不幸な世に生まれついた身を淋しがって清い涙を流して然して後に死ぬのだ。」

上村 元太：昭和18年1月10日入営、20年4月戦死、24歳。『わだつみ一集』

22) 田坂徳太郎：昭和16年1月入隊、20年6月戦死、28歳『わだつみ一集』佐藤 孝：昭和18年12月1日入営、20年7月、戦死。21歳『わだつみ・一集』

23) 篠崎二郎：昭和13年応召、15年召集解除、16年8月再度応召、19年1月戦死。34歳『わだつみ一集』「飽くまで生きているかぎり強く明るくありたいものと思っています。そしていよいよ最後の時には国家と民族とあなたを含めてすべての人々を祝福しつつ愛と誇りとの中に安らかに静かに生を終わりたいものです。／その日になって私の身をもってつくしたいささかの労苦を思いやってくだされれば私はそれで本望です。……運命があなたにとっての良き夫たることを許さなかった私としてはそう考えることによってあなたへの幾分の義務をはたしたような安らかささえ覚えます。」渡辺 研一：昭和14年1月入隊、18年1月召集解除、19年7月再召集、20年5月27日戦死、29歳『わだつみ二集』

* 学問、研究に拠り所を求める。「数学書を繙き始めてからの俺の生活の何たる静かな喜びだろう。」「夜ごと書物を繙く時、人生の悲哀も汽車と共に遠くどこかに去って行く。」

「友よ、今後いかなる烈しい現実にも置かれても俺は相変わらず歩いて行く、コツコツと自らの道を踏みしめて行く、」²⁵⁾

「私の生命も滅びるかもしれない。だがどんなことがあったにしろ、いつも変わらないもの、それは私が今までに苦しみあえぎなやみした私の絵であろう。絵は永遠に残ってくれるだろう／母の額と眼とを、私は母を思う限りにおいては自らを無にすることは出来ると思った。今度帰られたら肖像を描こうという構想にふけた。」²⁶⁾

* 次代の文化建設に、後に続く者あるを信じて。「ただなによりも案ずるのは、私たちが護ったこの国が次の次代にいかなる生成をし、発展するかということです。戦争直後の疲弊や変調よりももっと先の文化の問題が気になります。私たちは自分たちの思想や仕事を受け継いでくれるべき人間をあとに遺したい。そして私のなしえなかった生活と理想を完成させてください。」²⁷⁾

* 諦観というよりも「あきらめ」

「一刻一刻が奈落への転落の刹那にある。何時か、今がその瞬間かもしれない。大きな眼には見えぬあらしがかける。かける。わけのわからないものが渦巻きの如く身を取りまく／何も言はない。生きようとも死なうとも思わない。何が意義があるのか、私は知らない。運命の流れを静かに見つめたい」²⁸⁾

24) 住吉胡之吉：昭和19年末より航空研究所に動員，20年5月24日戦災死，24歳『わだつみ一集』

25) 中村 勇：昭和17年12月入隊，19年4月戦死，21歳『わだつみ一集』

26) 佐藤 孝：昭和18年12月1日入営，20年7月戦死，21歳『わだつみ一集』

27) 久保恵男：昭和18年12月入団，20年殉職，25歳『わだつみ二集』

28) 柳田陽一：昭和17年2月1日入隊，同年10月殉職，23歳『わだつみ一集』

* 祖国日本の敗戦、つまり自己の死が自己の信じている真理を確認することになるであろうと冷厳に現実を見つめている。「栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊ともいふべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ、身の光栄これに過ぐるものなしと痛感いたしております。」と記した彼は祖国の敗戦を確信している。「権力主義の国家は一時的に隆盛であろうとも必ずや最後には敗れることは明白な事実です。我々はその真理を今次世界大戦の枢軸国家において見ることができると思います。／真理の普遍さは今、現実によって証明されつつ過去において歴史が示したごとく未来永久に自由の偉大さを証明して行くと思われます。／明日は自由主義者が一人この世から去って行きます。彼の後ろ姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。」²⁹⁾心中満足で一杯ですという彼の言には彼の悲しみが溢れている、また生命長らえた者、後世の人々に対する痛切なる訴えである。

『わだつみ』に収録されている遺稿（この遺稿は『二集』には採録されていない）の中で私が最も感動した遺稿は佐々木八郎のそれである。

* 人間の立場から、彼は自己をよくみつめている。ここで彼は正義を論じているわけではない。当時語られていた「民族」「国家」というようなものから離脱したところから、事態を観察している。彼は「人間」の立場から苦悩に処している。長文の引用は佐々木君の文を是非読んでほしいという私の思いの表われである。「一応新しき時代のエトスに近いものがみられ、物的基礎も出来つつある今日、なお旧資本主義体制の遺物の所々に残存するのを見逃す事は出来ない。急に払拭出来ぬほど根強いその力が、戦敗を通じて叩きつぶされる事でもあればかえってあるいは禍を転じて福とするものであるかも知れない。フェニックスのように灰の中から立ち上がる新しいもの。我々は今それを求めている」と状況を認識している。「大内君は僕が戦死する事など考えてはならぬという。自分の任務でない所で死ぬのはヒロイズムの一時の感激である。そんなのは愚かしき事だと言

29) 上原良司：昭和18年入隊、20年5月沖縄に戦死。22歳『わだつみ一集』

う。……しかし僕は戦いの庭に出る事も自分に与えられた光栄ある任務であると思っている。／戦いの性格が反動であるか否かは知らぬ。ただ義務や責任は課せられるものであり、それを果たすことのみが我々の目標なのである。全力を尽くしたいと思う。反動であろうとなかろうと、人として最も美しく崇高な努力の中に死にたいと思う／名もなき民とし自分の義務と責任に生き、そして死するのである」と記している。

戦いの性格が如何ようなものであれ、戦争は人を殺すことである。進歩的戦争であるなら人殺しは許されるのだろうか。否である。進歩的戦争であったとしても人殺しは許されない。「我々がただ、日本人であり、日本人としての主張にのみ徹するならば、我々は敵米英を憎みつくさねばならないだろう。しかし僕の気持ちはもっとヒューマニスチックなもの、／憎まないでいいものを憎みたくない、そんな気持ちなのだ。正直な所、軍の指導者たちの言う事は単なる民衆煽動のための空念仏としか響かないのだ。そして正しいものには常に味方をしたい。そして不正なもの、心驕れるものに対しては、敵味方の差別なく憎みたい。好悪愛憎、すべて僕にとって純粹に人間的なものであって、国籍の異なるというだけで人を愛し、憎む事はできない」と。佐々木の言う義務と責任は人間として崇高であり、美しいものを尊敬すること、醜い、卑劣なこと見逃さないということであろう。「僕の今の気持ちは、日本人ではあるが、狭いショーヴィニズムを離れた気持になるのであるからには僕の現在とる態度も純粹に人間として、国籍をはなれた風来の一人間として、父も知らぬ、母も知らぬこの世に生まれた一人の人間として」³⁰⁾の義務と責任を果たそうということである。真に

30) 佐々木八郎：昭和18年12月9日入団，昭和20年4月14日戦死。23歳『わだつみ一集』市原豊太は次のように述べている。「経済の学徒で、入隊がきまっても資本論の勉強をやりつづけていた佐々木八郎君は『はるかなる山河に』『わだつみ一集』の中で恐らく最も美しく高貴な文章を書いて死んだ。宮沢賢治の『鳥の北斗星』についての彼の一文を、私は世界中の心ある人に読んでもらいたい。」所収『わだつみのこえに 応える』82頁，東大協同組合出版部，1950年

国民にして世界人であれば守るべき倫理もおのずと見出されてくる。佐々木の依拠するところは人間の踏むべき道、即ち人道である。佐々木はかかる立場から与えられた職務をつくすと言うのである。彼は特攻隊員として沖縄海上に散った。彼は人間としての立場から苦悩に処した。

小田切は『一集』の「あとがき」で佐々木八郎の遺稿に対して「戦争の性格がもしも反動的なものであるなら、そのような戦争の課する義務や責任を忠実に果たすことが人として最も美しく崇高な努力だなどと、どうして断定することができよう」と注釈している。続けて「あの戦争下に戦争の本質が反動的であるか進歩的であるかをまさに歴史的展望において問題にするところまで進みでていた学生たちの存在したことを知るのである」と述べている³¹⁾。引用しているところから推察されるように佐々木も今次の戦争の性格に納得しているわけではない。人として崇高な行為というものについて佐々木と小田切の考えの違いは明白である。

この戦争を性格づける小田切の基準がどのようなものであるのか明示していないのでわからないが、おそらく明示する必要もないほど彼にとっては自明のことなのであろう。マルクス・レーニン主義からのものであるとすると、この主義の尺度は外側から個々人を判断するものである。したがってこの主義によると正義と不正義、善と悪の判定は容易になされる。正義の軍隊は「死の家」ではないという主張に連なる小田切の「あとがき」によると遺稿に込められている「思い」は反動的戦争に抵抗する実践によってのみ完成されるということになる。しかしマルクス・レーニン主義の外在的尺度を受け入れない佐々木にとって小田切の批判は納得し難いであろう。往々にして外在的尺度は客観的状況に支配されて採用されている。したがって客観的状況が変わったと躊躇なく、判断すると彼は別の尺度を採用するのである。外在的尺度とは主体の欠落した尺度である。したがって

31) 小田切秀雄「日本戦没学生の手記に附して」所収『日本戦没学生の手記、きけわだつみのこえ』東大協同組合出版、1949。これは後に岩波文庫で『わだつみ一集』として刊行された。ただし小田切の「あとがき」は載っていない。

彼は精神的葛藤も悩みも感じることなく容易に別様の解釈をする。小田切の文脈では正義の（進歩的）戦争は必ず勝利する。反動的連中は殺されなければならないということになっていく。小田切の見解と『鳥と北斗七星』の佐々木八郎の注釈との違いは明白である。

戦争にしても、何にしても社会的出来事は主体のフィルターを通して顕現するのである。

主体が戦争をどのように受けとめるか、主体に立脚して戦争を判定するとき、主体が依拠するところのものが、彼の尺度となる。私は佐々木八郎の遺稿は小田切の注釈を遙かに超えて普遍の立場に至っていると考えている。佐々木八郎は戦争の勝利にアイデンティティを求めているのではない。たとえその戦争が進歩的と判定されてもである。

四、『わだつみ』の編集方針について

戦没学生の遺稿を読むうちに私は、戦前は彼らと同じ境遇、今は彼らの遺した文書を編集する立場にある編集員の戦争への関わり、軍隊生活を是非とも知りたいとおもった。なぜなら『わだつみ』の編集は／自分たち自身が遺書を残して死すべかりし身でありながら生命長らえたことをむしろ歴史の偶然と痛感せずにはいられなかった学徒出陣組を中心」としてなされたのである³²⁾。彼らは編集員として戦没学生の文書を取捨選択して一書にまとめあげたのである。そこには当然、彼らの価値観が反映している。彼らの価値観は戦前、戦後一貫しているのであろうか、それとも世の知識人と同じように価値観を転換させているのであろうか。このことが明示されておれば、『わだつみ』の性格、更には戦没学生の声がより身近になるのではないかと私は思う。『はるかなる山河』『わだつみ一集』『わだつみ二集』にいたる『わだつみ』の性格の変遷については『わだつみ二集』の「あとがき」で平井啓之が述べている。「『はるかなる山河に』『第一集』『第二

32) 平井啓之「あとがき」所収『わだつみ二集』岩波文庫、365頁、1988。

集』の書物の間には、同じ血脈（平和を希い非戦をを誓うと云う）を伝えながらそれぞれに固有の特色がみとめられる。それはまず、三冊の書物をへだてる二年、またさらに十数年という歳月の中に、日本が生きたはげしい戦後の時代の移りゆきがそれぞれの書物の在り方に反映されていることによるだろう。」「『二集』には・・・昭和の日本が経験した戦争の悲劇を総合的に、またある程度客観的に、とらえようとする努力がみられる。・・・昭和の戦争体験を丸ごととらえ、それを平和のために後生に何としてでも伝えよう、というのが編集方針であった」³³⁾『わだつみ』を平和活動の一環に位置づける編集方針と学徒の苦悩、学徒のありのままの姿を知らしめる編集方針とではどの文章を採録し、どれを外すかという取捨選択に違いをもたらす。『山河』と『一集』の間には編集上の力点の相違がある。／前者は人間性により力点をおき、後者は平和により力点をおいている」と語っているのは古山である³⁴⁾。『一集』編集の顧問格である渡辺一夫は次のように述べている。「僕は、かなり過激な日本精神主義的な、ある時には戦争謳歌にも近いような若干の短文までも、全部採録するのが公正であると主張したのであったが、出版部の方々は、必ずしも僕の意見には賛同の意を表されなかった。現下の社会情勢その他に、すこしでも悪い影響を与えるようなことがあってはならぬというのが、その理由であった。」³⁵⁾渡辺の言をそのまま信じると「出版部」の方々は『わだつみ』を政治的に利用しようとしたということになる。

私は学徒兵の遺稿はどれも深い悲しみと苦悩をたたえていると解釈している。彼らは自己の苦悩を赤裸々に晒している。その苦悩のあるものを捨て、あるものを編集者は採用したのである。当然、編集者も自己の苦悩をさらけだすべきである。それが「生命長らえた」ものの責務であり、彼ら戦没学生に対する礼儀である。

33) 前掲、平井啓之、360頁

34) 山下肇。古山洋三、編『人生の名著』

35) 渡辺一夫「感想」所収『日本戦没学生の手記、きけわだつみのこえ』『わだつみ一集』

解釈者自身も自己の価値観、生活実践を意識的に把握しておかなければならない。彼ら学徒兵は言葉、言語を通じて彼らの現実に迫ったのである。すなわち現実を解釈したのである。彼らは、彼らにとって所与である言葉、言語の向こう側にある現実に迫ろうとしたのである。彼らの解釈対象が、現実であると云うとき、現実には言葉、言語が含まれているのである。

私が『わだつみのこえ』に接して最初に関心を寄せたのは編集者の編集方針である。

渡辺が述べているように『わだつみ一集』は軍国主義的文章や国粹主義に連なる文章を排除して編集されている。かかる文章は『わだつみ一集』の価値をそこなうものであると判断されたのであろう。軍国主義的文章と云い、国粹主義的文章であるとの判定は敗戦後、精神的、肉体的苦しみから解放された人々によってなされたものである。それは、これらの文章は彼らにとって戦後の「平和」スローガンに敵対するものと感じられたからであろう。編集者は戦没学生が直面した現実を戦後の自分たちの現実で置き換えたのである。彼らが、悩み、苦しんだ現実を生命長らえた自分たちの心を安んじてくれる言葉で置き換えたのである。

編集者たちは、戦前、自ら抱いていた価値観の批判を編集方針に反映させているのではないか。もし、そうであったなら、編集者は、戦没学生を精神を圧殺したと言い得る。戦没学生を精神を理解するには戦没学生にできるだけ近づかなければならない。生き残った編集者だからこそ、そのようにすることができるはずであった。

中村克郎は「日本戦没学生記念会」を設立した意図を「戦争体験の思想化」にあると述べられている。「戦争体験の思想化」とはどのようなことであろうか。編集者の考えている「思想化」の主旨に反するような文章は『一集』には編集員の野元菊雄によって採録されなかった。中村も野元も彼らの遺稿を編集方針（価値観）に従って取捨選択している。星野芳郎は『一集』の編集について次のように述べている。「この文集（第一集）は、戦場にむかう自己の運命についての悩みや苦しみの言葉が主として採録されて

いて、最後には人間的な苦しみも捨てさって死んでいったものの言葉は、ほとんど取り上げられていない。悲劇は苦しいとうめき声をあげることだけにあるのではなく、自ら思考を切断して苦しみもなくなることにこそあったのだ。……誤った編集方針に戦没学生の人間像は現象的にも歪められ、本質的にも悲劇の底の深さが明らかにならないという結果をきたした」と批判している³⁶⁾。これに中村は答えている。「{ほとんど取り上げられていない} どころか、細心に読んでゆくならば二書（『はるかなる山河に』『わだつみ一集』）の到るところにみちみちしていると私は思う」と述べている。中村の星野への反批判は「八紘一字」「万世一系」「天壤無窮」「七生報国」「承詔必謹」「天皇陛下万歳」というような言葉を使っている手記も採録されているのではないかというものである。中村はこれらの言葉自体が軍国主義を意味すると理解しているのであろう。したがって渡辺に対しても星野に対しても反論できると考えているのだろう。かって軍隊は米英語を敵性用語として使用を禁止したのであるが、中村の反論はこれと同じことではないのか。

単語の意味、評価は観念（解釈）体系に占める位置によって与えられるのであって語それ自体の意味、評価は辞書によって得られるのではない。つまり文章全体のなかで語は位置づけられて意味を与えられているのである。

私たちは『二集』で野元によって採用されなかった遺稿を読むことができる。

これだけでも『一集』と『二集』の編集方針の違いを知ることが出来る。採用されなかった遺稿は色川英之助と木戸六郎のそれである³⁷⁾。私は両氏の遺稿を読んでみて何故これらが採録を拒否されたのか、全く理解できない。おそらく木戸六郎の遺稿は「徴集猶予奉還」運動の中心的人物であったからという理由で野元によって採録されなかったと推測する。もしそう

36) 『わだつみ一集』の「あとがき」で中村克郎が引用している星野芳郎の一文。

であるなら、私は野元の遺稿解釈の独善さにあきれざるばかりである。彼は言う。「いくつかの「神州不滅」, 「七生報国」の文字にもうなれてしまった私たち編集者もこれにはあきれってしまった。「神州不滅」も「七生報国」も、あのような世界にほうり込まれて、どうにもならなくなった者の声と聞けば、幾分の許し得る点もないではなかった。しかるにこのK (木戸) 君は一切の批判を斥けて、みずからのそのような世界に入ろう、他人も引き入れようというのだ。」「それにしても、彼が恋愛の中で「生」を求めたときには、幾万の学生は死地に追いやられていた。一応「限定された生」などと理由はつけても、自分の罪も自覚せず「生」を求める」自分勝手な人間であると。そして野元は傲慢にも「彼みずからは死をもってその罪をあがなった」と述べるのである³⁷⁾。

野元によると木戸君は罪人なのである、木戸君は人間としての罪を犯したというのである。野元の表現を借用すると「みずからの死をもってその

37) 木戸六郎：昭和20年1月入隊，20年5月戦病死，22歳／色川英之助：昭和17年10月1日入隊，19年5月3日戦死，26歳。木戸君は戦い（死）の場への参画を身近に感じれば感じるほど「徴集猶予返上」の運動に熱心になる。「私の心には強く生の有限性が支配していた。それゆえ人生観の基底は現実性の絶対肯定である。したがってまた、それは外面的生活にも影響し、支配して、私をして激し過ぎるほどの意欲をもって、政治問題に関心していったのである。」『わだつみ二集』海軍予備学生の募集に当たっては早稲田大学が二千名の多きにのほり全国の一割を占めるにいたった。野元によるとこれが木戸君の死によってあがなわなければならぬ罪なのである。果たしてそうなのであろうか。私に言わせれば、木戸君は当時の多くの学生たちのように真面目な学生の一人に過ぎない。多くの学徒兵が感動したように木戸君もまた『ドイツ戦没学生の手紙』に感激している。彼もまた国家の危機を憂いたのである。色川君の『二集』で採録されている漢詩は野元によって「戦中派の学生の極度の思想的混乱」を示すものとして『一集』に採録を拒否された。色川君は漢詩の末尾に正直に（先生よ、僕にはわかりません）と記している。思想的混乱というよりも依拠すべきところを求めての苦しみの表現ではなかろうか。色川君も当時の一般的学生なのではなかろうか。それは死に直面した学生たちの心の叫びなのであって採録を拒否する野元の文章に私は傲慢さと非礼を感じる。

38) 野元菊雄「あるのらなかつた手記について」所収『わだつみのこえに應える』東大協同組合出版，148頁，下線引用者。

罪をあがなわなければならない」者たちは生命長らえた者たちの中に多く存在しているのではないか。私は『わだつみ』の登場者と同じ苦悩を木戸君の遺稿の背後に読み取る。翻って私はこのような文を堂々と書くことができる野元の戦中時代、軍隊生活を知りたいと思う。

平井は述べている。「私は野元氏が{鞭打たざるを得ない死者}として挙げている当の木戸君が戦争末期の20年1月、在学のまま入隊、同じ年の5月には早くも戦病死をとげているその束の間の生涯を思い、ただ声もない。何故か。私はそれが戦争の実相だと知っているからだ。」³⁹⁾まさに平井の言っているとうりである。木戸六郎も軍国主義の犠牲者であり、多くの学生の一人名である。色川英之助の詩もまた野元によって採録を拒否されたのであるが、二つの遺稿を読んでみて野元の拒否の理由が私には全く理解できない。

『はるかなる山河に』に付されている野元菊雄、三井為友の「あとがき」は対照的である。野元の「失われなかった人間性」では主語は殆ど「私たち」であるのに対して三井のそれは「私」となっている。お二人は学徒兵と同じような戦争体験をもっている。

主語を「私たち」とするか、「私」とするかによって文章の内容は異なってくるのである。編集委員の野元の「失われなかった人間性」を読んでみよう。彼は編集委員として、またかつての学徒兵として、多くの遺稿に目をとおされて、採録すべきどうかの取捨選択をされた。

「私たちは生き残った。あの激しい戦争の中をとにもかくにも生き残った」。

いうまでもなく、「私たち」と語ることで「私」は「私たち」の背後に隠れてしまうのである。学徒兵であった「私」は消えてしまっている。「私」は「私たち」の一人にすぎない。かく表現する文章効果は、引用した文章の意味内容に対して説明の義務を免れるということである。換言すると野

39) 前掲、平井「あとがき」368頁

元は「私」について語らないから、容易に採録されている学徒兵の精神を自己のものとし得る。

「私たちはいつもまじめに考えていたことを。そして、どんなにひどい戦闘の中でも人間性を失わなかったという事を。私たちは国籍を違えて生まれたというだけの理由で敵味方となって殺し合わなければならなかった敵国人を深い愛の目でさえながめていた。はっきりとはわからないながらも、そうした事をしなければならぬ様にさせた、私たちの上にかぶさっている黒雲の様な或るものを憎んでいた」⁴⁰⁾と野元は述べている。

ここでの文章に類似しているものを私は『わだつみ一集』（佐々木八郎、柳田陽一の遺稿）の中に見出す。野元が戦前このような感情を抱いていたかどうかはわからない。しかし野元は私たちの一人として上述の文を書いておられる。つまり野元は佐々木君や柳田君の精神を共有していたというのである。

「私たち（私）は生き残った。しかし、この文集の中には特攻隊員として出撃する直前に書いた遺書もいくつか収められている。これらを読み、また幾多の戦死した若い人たちの顔を回想すると、私たち（私）は結局生き残った者も死んだ者も底につらなるものはひとつだったという気がせざるを得ない。」⁴¹⁾かくて野元は『わだつみ』学徒の代表者となった。彼らの苦悩は野元の口から語られる。野元は木戸君を『わだつみ』学徒の代弁者として裁いたのである。自分自身を語らずして他者を裁くことは精神的にいかに穏やかであることか。

野元は自分を語るべきであった。そうすれば「失われなかった人間性」は『はるかなる山河』にふさわしい「あとがき」になったであろう。

野元とは対照的に三井は正直に自己の気持ちを晒している。「（私は）この手記をよむことは、純粹の鏡を見せられるようで、本当につらい。自分

40) 野元菊雄「あとがき（失われなかった人間性）」所収『はるかなる山河に』1947、東大協同組合出版部。

41) 前掲、野元。括弧の（私）は引用者

の顔が、そこにどんなに醜く映っていることか。いま人々が追憶の集いや反省の会を持つとうとしないことは、生活の忙しさからばかりではない。この醜い自分の姿を見るにたえないのではないかと思う。過去を過去として密室の中に閉じこんで、ひたすら現在に興じ、明日に関心を持っている姿。あるいは自分はもともとの民主主義者で、嵐の中でも純粹を守りつづけてきた者であるというように強弁して、時を得顔に振舞っている顔、その様な姿や顔が、この手記の鏡の前にどんな風に映るであろうか。この手記は、純粹であった日本人たちに対する命をかけての遺言である。偽りの多い人々に対する懺悔と祈りの請書である」と⁴²⁾。彼は多くの学生を戦場に感激の涙で送ったという。出陣する「学生たちを羨みさえした」とも述べている。彼もまもなく学生たちのあとを追うて勇んで応召した。しかし彼は皇軍の実体をいやというほど実感させられた。それは学徒兵の遺稿に記されているとうりである。南方戦線の地獄を彼は体験するのであるが、この地獄に学生たちを勧誘したのだという思いは戦後の彼に重くのしかかっている。

地獄というのは物理的、肉体的条件によってのみ規定されるのみならず、自分たちは安全なところに居て無謀な作戦を強いる軍首脳に対する怒りによっても規定されている

彼の「あとがき」は野元のそれとは対照的に主語が明確である、つまり自己を晒しているがゆえに私は彼を信じることができる。彼は「偶然に生きて内地の土を踏んだ私はこれら多くの戦友たちの遺志を継いで、命は南方に捨ててきたものと思って、日本再建のために尽くしたいと思っている」と述べている⁴³⁾。

五、『わだつみ』の編集について

私は戦没学生を支配していた価値観、風潮に可能なかぎり身を寄せて『わ

42) 三井為友「『戦没学生の手記』に寄せて」所収『はるかなる山河に』233頁

43) 前掲、三井為友

だつみ』を読むべきであると考え。そうすることによって戦没学生が抱えていた苦悩、憤りに接近することができる。しかしながら『わだつみ』は戦後の価値観、「平和と民主主義」に反しないようにという意図の下に編集されている。その為の手段として、その為の道具として編集されているようである。編集者・中村克郎は「戦争体験」の思想化と言われているが、「生命長らえ」た者たちがつい最近まで抱えていた価値観を戦後の価値観で寸断し、解釈するということは編集者たちが現に置かれている状況を把握することに眼をつぶることになるであろう。編集者たちは戦後の尺度で戦中を整理するのであるが、これを容易に可能にしているのは「戦中」と「戦後」を断絶させているからである。「断絶」は生命長らえた彼らの願望であろうが、彼らは自己の精神を切開し、戦中の自己と戦後の自己を大衆の前に晒さなければならない。少なくとも「断絶」はかかる作業を経てのみ可能となるのである。「断絶」が願望の段階にとどまっている限り、彼らは肝心の現在状況を把握する尺度を持っているとはいえないのである。編集者の現在状況を解釈する尺度は仲間内だけで作り上げたにすぎないものである。したがってその尺度では現在状況から将来を志向する解釈を提示することはできない。将来を志向する為には現在状況を判断する尺度を意識化していかなければならない。状況とは客観的状況と主観的状況のことであるが、特に重要なことは主観的つまり自己の価値観のことである。自己の価値観を意識的に把握することができないのであれば、戦争体験の思想化は為し得ないであろう。彼らは戦後の価値観で戦前の価値観を批判、糾弾することが思想化であると考えているようである。戦争体験の思想化とは外部から批判的思考を注入することで達成されはしない。小田切秀雄の「あとがき」にもこの傾向が見られる。「やっと平和になって、傷つき疲れた生活と魂とに人間らしい明日への希望と可能とが開かれはじめてからまだわずか四年しかかかっていないというのに、またも戦争のキナ臭い匂い

が漂いはじめているのだ』⁴⁴⁾と述べているが、戦争のキナ臭い匂いを自明のこと、わかりきったこととしているのではないか。

編集者たちも当然のこととしてこの言を受容しているのである。だから彼らは小田切に『わだつみ』の正しい読み方なるものを依頼する。その依頼を受けて出来上がったものが「あとがき」である。

出 隆は「本文を読むひとは、そのまえに、巻頭の渡辺氏の文章と巻末の小田切氏の文章を読むように」と薦めている。『わだつみ』の正しい読みとり方というものがあるのであろうか。編集者や出 隆は然りと答える。

『わだつみ』の読者にその正しい読み方を指示するとはどういうことなのか。正しい読み方というのは一つの結論を指示するということになるのである。個々人によって読み方は様々ではないのか。編集者や小田切、出の諸氏は『わだつみ』を平和への教科書としたいと考えているのであろう。

たしかに『わだつみ』は戦争の実相を良く伝えていると思う。したがって平和の尊さはよく訴えられている。しかしこれは戦争の根本原因を解き明かしているわけではない。『わだつみ』は一步すすんで「あの戦争は侵略戦争であった。／帝国主義的独占資本とその手先の仕業である」という認識に至らなければならぬというのが出 隆の主張である。「日本の若々しい魂を組織的・制度的に追い込んだ者たち」の認識に『わだつみ』の読者は至らなければならぬと彼は言う。「本当の敵」を知れ、それは帝国主義的独占資本であると彼は主張する。ここに至るのが『わだつみ』の正しい読み方であると彼は言っている⁴⁵⁾。

この文章は(1949・12・22)に脱稿しているのであるが、この文章の射程はあまりにも短いと感じるのは私だけではないであろう。出 隆は敗戦直後の支配的であった価値観、風潮を検討することもなく受容し、それに依拠してこれを書いたのであろう。『わだつみ』読者はまず学徒兵を支配していた価値観、風潮に身を寄せて彼らの遺稿を読むべきであると考える。

45) 出 隆「わだつみのこえになにをきくべきか」所収『わだつみのこえに答える』

彼らを囲い込んでいる雰囲気为一体となって軍国主義を強化していった。だから私はかかる雰囲気を突き破る萌芽を彼らの遺稿のうちに読み取りたいと考える。これがチャンギイ刑務所で処刑された木村の訴えに応えることである。「満州事変以来の軍部の行動を許してきた全日本国民にその遠い責任がある／万事に我が他より勝れたりと考えさせた我々の指導者、ただそれらの指導者の存在を許して来た日本国民の頭脳に責任があった」と木村は書き遺している⁴⁶⁾。

私は『わだつみ』を読みながら幾度となく、涙を拭った。これは私だけでなくほとんどの読者が経験するところであろう。しかし流した涙の多寡によって『わだつみ』の思想化が果たされるというものではない。そのためには戦争を引き起こすものを認識しなければならない。とは言っても私は出 隆の言を採用はしない。

私は佐々木八郎の遺稿に強く惹かれる。戦争の根本原因を認識するには民族主義を脱却した普遍的立場から論理実践を組み立てることが重要であると考え。戦前、戦中に私たちは「民族主義」のレトリックに取り込まれてしまった。何故か。「民族主義」は容易に私たちの内部に入り込む言葉である。戦後においても然りである。だから、私自身の内なる民族主義的幻想を摘出し、日常的に民族の枠を越えた実践をしなければならない。

『わだつみ』の学生たちは自己の内面を切開して自己の問題をさらけ出しているのである。読者である私たちも彼らと同じように自己の内面を切開する作業を絶えず自己に課さなければならないのである。換言すると私たちは日常生活を「偽装」しているのではないかと絶えず反省しなければならない。すなわち実践と正当化解釈との乖離を縮小するように努力しなければならない。かくして私たちは『わだつみ』を解釈することができる。客観的政治状況から遺稿を解釈するのか、そのような状況に置かれた主体の側面に出来る限り、身を寄せて解釈するのかによって解釈は異なって

46) 前掲、木村久夫

くるであろう。戦没学生の言うところをまず受け入れて、つまり英雄ではない、凡人である自分がその立場にあればどんな発言をし、どのように身を処すであろうかを考える。支那事変から大東亜戦争へという時代状況は彼らにとっては所与である。かかる状況下で人間としての崇高な生き方を追求するという佐々木八郎の姿勢は驚きである。それは閉じこめられた、圧殺された状況の中でなお人間の立場を追求するという強さにである。私は小田切のように彼の姿勢をまやかしなどと断定することはとてもできない。戦争体験の思想化は、生命長らえた者たち、戦後世代の私たちが平和、平和と大合唱することでは達成されないのである。私たちの内なる民族主義的幻想を日常的に断ち切る努力をしなければならない。これが私にとっての『わだつみ』の教訓である。

『わだつみ一集』（岩波文庫、1982）は『戦没学生の手記：きけわだつみのこえ』（東大協同組合出版部、1949）を底本としている。『わだつみ二集』の平井の「あとがき」（註。6）に『山河に』と『一集』『二集』に採録されている遺稿についての説明がある。